

# 関西大学図書館蔵『為世入道物語』翻刻

太 田 満

## 略 解

江戸前期写本、大、一冊。袋綴改装。縦二四・三厘、横一八・四厘。金泥秋草下絵紺色後補替表紙。題簽・内題等、なし。墨付二一丁、每半葉一一〜一五行（一定せず）。字面高さ、二〇・八厘。

備考一、書名『為世入道物語』は、仮題である。二、上部の中程全体が破欠、全丁に亘って虫損が甚だしい。三、冒頭二丁分、巻末二〜三丁分程を欠く模様である。なお、翻刻に際しては、私に改行、脱点を多く施した他は、總て原本に忠実であることに努めた。

本書、所謂『為世の草子』である。従来フォッグ美術館寄託の室町後期絵巻（元冊子本）のみが流布、研究に供されてきた（古典文庫『未刊中世小説三』に翻刻、「在外奈良絵本」に影印翻刻、市古貞次氏解説）。そのフォッグ本には、「在外奈良絵本」の翻刻頁中

の注記によれば、四箇所の脱文がある。関大本が首尾を欠くのは惜しいが、伝本の増加ということに加えて、フォッグ本の脱文をほぼ補い得ることは貴重である。ただ、両本、物語の展開は一致するものの、叙述の細部には可成りの隔たりがあるので、直接の書承関係を言うことは出来ない。更なる善本の出現が俟たれる。

（橋本直紀、補）

## 為世入道物語（仮題）

（首欠）

給ひける、もりやそ（つゞ）のとをつけ、もてなしかしつき給ふ事、かきりなし、たゞあけくれには、この人々の、おとなしくならせ給ふ事を、よろこひて、あかしくらさせ給ふ事、かきりなし

しかるに、そのころ、かまくら、みたれぬときこそし□□やうとのさわき、申事はかきりなし、□□こう三年、葵酉のとし、すてにみやこを、おちさせ給ひけり、人なみくりに、為世もみやこを、おち給ひけり、まつ我かちきやうのところなればとて、くすわのさとゑぞ、くだらせ給ひけり、やかて、さとのめんく、いてあひて、とあるさいしよへ、いれ牽りけり、そのうち、くろきの御しよをつくりてぞ、まいらせける、しのひくくの、御みつきをぞ申ける

かくて、とし□□を、おくらせ給ふほどに、はや三ねんのせひ□□をぞ、おくらせ給ひけり、さて、しはしこそ、□□人もみつきまいらすへけれ、ひとりふたり、おちゆくほどに、みうちには、ししう、れひせんとて、ひめきみ、我かきみの、御めのとはかりにぞ、なりにけり、それも、しはらくこそはありつれ、あさゆふのけむりも、たゑまかちに、なりければ、ころろならず、うせにけり、たゝのこり給ふ人とは、ひめきみ、わかきみ、さては御ふたところはかりなれば、よろづ心ほそく、物あはれなる事は、かきりなし

さるほどに、為世のきやう、おりく、思ひ給ふやふ、つらく、物をあんするに、まことにいみじきあい子、な□□けふかかりしつまでも、ついに、そひはつへからす、ひとりむまれ、ひとりしするなれば、めいとに、ひとりおもむき、なிரりにしつまん□□は、いかはかり、くやくしおもひ、こうくわひすとも、そのかひあるましと、

おもへとも、さすかに、つまや子どもの事をおもふに、ころろはやみになりぬへしと、思へとも、さりながら、いつまであるへきに、あらされは、たゝ一すちに、おもひきり、きやうかひをもすて、まことのみに、いらはやと、思ひ立を、ゑんとして、すてに、しゆつけすへき、月日をさため、ころろひとつに、お□□ひしたゝめて、世のうき事をくわんし、あり□□けの月の、くまもなき、ひかりをまねき、夜もすから、あかしくらせ給ふほどに、やうく、あらましの月日にも、なりければ、かねてより、おもひさためたる、ことなれとも、さすか、このみとせ、すみなれたる、やとなれば、なこりおしくて、あなたご□□たを、見めぐり給ふに、のすちにうゑしくさ花の、露おもけなるけしきも、おりしりかほにてあはれなりわれ、こゝをいて、ぬ□□ならば、たれやの物か、あはれむへきと思へは、すそに、人しれぬ御なみた、うかみけれとも、かくころろよくては、かなふましと、思ひ給ひて、さらぬてい□□もてなして、きたの御かたにむかひて、のた□□いけるは、我はけふより、おとこ山へてまいり候て、七日さんろう申へし、あひかまへて、その間、おさなき物ともを、御なくさめ給へと、いまそかし、の給へは

きたの御かた、おもひ給ふやふは、ふしきの人のおほせかなと、あなかに、かやうには、のたまはすと思ふより、きも、身にきはり、

しはらくは、御返事もしたまはず、そのうち、のたまひけるは、あらあましの、御す□たや、世□□りしときには、ようかんひれひにして、かうしよくをこのみ、かりそめの、御ありきにも□□かいわくるまをとわせ、きやうちう、きわかして□そあるき給ひつるに、いまわ、いつしかひきかへて、あ□ましき、御ありさまにて、御物まいりは、御むよふとは、思へとも、おんなの思ふ事は、かひそなきとも、かくも、御はからひにてこそ、候はんすれと、のたまひければ

為世、おほせはさる事にて候へとも、たゞ、こんしやうこしやうのため、又□子どもの、いのりのために、参り候なり、七日□申さむも、ほどあ□ましき事なれば、御まち候へとて、ふたりのおさなき人を、ひさにおきて、かみ□□なて、おほせられけるは、あなむさんやな、世にありしときならば、かやうのすかたにては、おくましき物を、かまへて、ちゝかほかへ、ゆきたらんあとにて、いはりし□、きたの御かたに、こゝろくるしきめを、人そまいら□な、我はやかて、かへらんするそとよとて、さらぬ□しにては、のたまへとも、つゝむなみたの、つたいきて、おさなき人々の、御かほにそ、かゝりける

我かきみは、おもひいれたまはて、てすきみして、為世にたはふれて、おはします、ひめきみは、何と□おほしけん、ちゝ□せん御

かを、つくくと、まほり給ひて、いつかたゑ御いり候そと、のたまいて、御なみたを、うかめ給ひければ、為世は物をものたまはず、いよゝゝ御なみたを、おさへかねてそ、おはしける、そのとき、ひめきみは七ツ、わ□きみは五才にそ、ならせ給ひける

さるほとに、□世、かく心よわくては、かなふましと、思ひ給ひて、ふたりの人々を、ひさよりすかしおろして、九月廿日あまりの事なるに、あわせの御こそて、たゞとつに、ところゝ、やふれたるかさうちきて、こんのきやはんに、わらんつしめはきて、きたの御かたゑ、いとま申そとて、出させ給ひければ、ふたりのおさ□き人は、ちゝ御せんは、いつくゑ御いり候そと、つれていらせ給ふとて、なき給へは、又たちかへり給ひて、ふたりの人をいたき、かみかきなて、なみたくみ給ひて、やかて、かへらんするとよ、さりとては、とゞまり給へと、のたまへは、あね□せんは、とゞまり給ひぬ、なをわかきみは、□たひ給ひけるを、きたの御かた、よりて、なくゝ、いたきとらせ給ひぬ

さて、きたの御かた、とくして、けかふ候へとて、なくゝ、のたまひければ、為世は、なくゝ、御返事にも、をよはずして、なみたのひまより、かくこそ、ゑひし給ひける

あらましの、ほとはこゝろに、いそかれて、けにすつるには、をしきふるさと

かく口さみ給ひて、なみたともにて給ひ、さて、おとこ山のたうけに、あかり給ひて、さもあれ、おきなき物どもの、心もとなきよと、思ひ出て、くすわのかたを、はるくくと、なかも給ふところに、としのよわひ、十三はかりなる、とうしきたりて、□とこ山へは、いつかたへ参り候そと、とひ給へは、此みちをかうとぞ、おしへまいらせて、ゆきけるか、立かへりて、御たひ人に、物申さんと、かくはかり

かしこきは、うからぬ世をも、いとひしに、いつまでとてか、の  
かれさるらん天竺云

かくあひし給ひて、かきけすやうに、うせにける

そのとき為世、ふしきの思ひをなし給ひて、これこそすなはち、八まん大はさつの御つけなれと、うれしくて、やわたへは、まいらすして、かうやさんへ、すくにのほり、大しの御まへにて、もとゆひきりて、れんけたに、とちこもり、こきすみそめに、さまをかへ、まことのみにそ、いり給ひける

さて、あとにおわする、おきなき人々は、七日をかそゑて、ちくこせんの、御けかうをそ、まち給ひける、夜のあけ、日のくるゝをかそゑて、まち給ひけるか、やうく、日かすもつもりければ、七日もほとなく、きたりけり、おとゝいの人々は、ちくこせんの、御けかうの日とて、きやうたいつれて、かとに、たち給ふこそ、あはれ

なれ

さて、きたの御かたは、とかくのひけいにて、かたのことくの、御まうけをそ、し給ひける、日もすてに、くれかたになりければ、ふたりの人々は、何とおそく入あるやらんとて、うちゑはしり、かとゑいて、まちなね給ひたるありさま、申はかりもなし

やうく、てらくの、入あひのかねも、なりければ、きたの御かた、おほしめすやふは、あはれ此人は、このほとんつかれに、身もよはり給ひて、おはしますらめと思召て、あはれ、人たにもあらは、みちまでも、やらまほしくは、思召けれども、たれやの物か、やとはるへきなれば、その日もむなく、くれにけり、あくれば、又ふたりの人々、さりとて、けふはとくぞ、御けかふあらんすらんとて、ひめきみは、かみうちけつりて、ふたつにゆい、わかきみは、ひたひかみにそゆひ給ふ、おとゝいつれて、かとにいて、いつくを、おとこ山とはしらねとも、とひて、そなたと、ゆふかたを、ちくこのひしさに、はるくくと、見やり給へとも、さらにそのかひそ、なかりけり、何とて、ちくこせんは、御入候はぬそとて、なき給ひければ、きたの御かた、の給ひけるは、ましてはし、いま御入あらんするそと、の給ひければ、むねうちさわきて、そのうちは、とかくの事ものたまはず、たくなき給ふよりほかの事そなき、さてそのうち、四五日までは、さりとともく、まち給ひけれども、せめて

のたよりに、はや心かはりにぞ、いてられけると思へは、うらめしきは、かきりなし

さて、かやうの御事をきつて、さとの物とも、あはれみまいらせて、物をとりあつめてぞ、まいらせける、この御ありさまを、見きく物の、あはれをもよほさすと、いふ事なし、さて、かくてたよりのもなし、すませ給ふほどに、ふたりの人々は、うらめしけれとも、その人のかたみと、なつかしく、又は、我子の、いとおしきのまゝに、とかく、そたてゆくほどに、つなぬ月日なれば、そのとしも、すてにくれぬ

つきのとしの、なつのころよりも、何とかしたりけん、また、なやみ給ひけり、されとも、御ひしなからも、おきなき人々をも、なくさめ給ひけり、四五日は、風のこゝちと、思ひたりけれとも、さわなくして、たゞよわりにぞ、なり給ひける、わかきみは、かなしみ給ひけれとも、けには思ひいれたまはず、あねこは、あとまくらに、つきそふて、思ひいれたる、けしきにて、かひやうし給ひたるありさま、よそまでも、あはれにぞおほえたる

さて、きたの御かた、おほせけるは、このいたはりにて、むなしくなるへし、さもあらんときには、あいかまへて、おとゝい、かたらひあひて、はわにねんふつ申てくれよと、なく、の給ひければ、ひめきみ、なみたをなかけて、申されけるは、さて、さやう

にむなしくなり給ひては、我らは何とかなり候へきぞ、ちゝこせんには、いきてはなれまいらせ、その、ちは、はわこせんをうたのみたてまつりて候へ、これさへ、何となるへきそや、もしも御いり、なからんときには、たれをか、たのみ候へきそと、おほせもはてす、さめ、と、なき給ひければ、我かきみの、おほせられるは、あねこせんは、何を御なき候そ、ちゝこせんの、こひしく御入候か、我も御こひしくこそ候よとて、なき給ひければ、大事にまします、はわこせん、このおとゝいの、ありさまを、つく、と、まほり給ひて、なみたをなかし、いきのしたより、かくねはかり

たらちねに、はなれしをこそ、とひつるに、我さへなくは、なにとなるへき

くすはにて、露のいのちの、きえけるは、おとこ山なる、あらしゆへなり

かくくるしげなる、いきのしたより、くちすさみたまひて、したひに、よはり給ひければ、おとゝいの人々は、何とおもひわけたる事もなし、たゞなき給ふよりほかの事をなし

さて、すてにかうと見えしかは、さとの物とも、あつまりて、おのゝ、見ければ、ひめきみは、おきなきひきに、むなしき御くひを、のせ給ひて、なき給ひ、我かきみは、ちいさき御にて、むなしき御あしを、いたき給ひけれとも、すてに、事きれぬれば、せんひを

くひても、かひそなし、そのとき、おとゝいの人々は、こゑををし  
ます、なき給ひける、さとの物とも、これを見て、心ある物は、申  
におよはず、心なき、いやしきしつのを、しつのめにいたるまで、  
みな、そてをぬらさぬはなかりけり、さてあるへきに、あらされは、  
さとの物とも、あたりのてらより、御そう四五人しやうし、のへの  
おくりをそ、したゝめけり

さるほどに、かくときこえければ、そのほとりの御そう、あつまり  
給ひて、おとゝいの人々を、こしのせんこに、あゆはせて、のへの  
をくりをそ、し給ひける、きせん上下、これを見て、みなねんふつ  
を申て、なみたにむせひける、さて、せんたんのたきゝに、つみこ  
めて、けむりとなすそ、あはれなる、そのゝち、さとの人々、より  
あひて、ふたりの人々を、あわれみまいらせて、しはらくは、その  
ほとりの人々、まはりて、なくさめてまつりけり

さるほどに、かの為世の卿、れんけたにゝ、おこなひすまして、お  
はしましけるか、にわかに、おもひ給ひけるは、我はこのたにゝす  
みしこと、すてにはや、三とせになりぬ、あやしのさとにとゝめお  
きし、つま子とも、何とかなりぬらん、おほつかなし、又は、れい  
ふつれひしやにもまいりて、にほんこくを、めくらはやと、思ひた  
つほどに、やかて、どうしゆくに、いとまこひして、おひうちかた  
にかけて、出給ふ、まつ、こゝろゆくかたなれば、くすわのさとゑ

そ、心さし給ひける

その日は、みちにとりうして、つきの日の、いりあひのほどに、  
くすはのさとにそ、つき給ふ、我かすみなれしところより、四五ち  
やうあまりへたてゝ、としよりたるおきな、あさましげなるとこ  
ろに、やとをかり給へは、かなふましきと申を、やふゝに、かり  
給ひける、したひに、とりより給ふほどに、このおきな、申けるは、  
ひしはまいるましきかと、といければ、みちにて、したゝめて候と、  
の給へは、らうふつを、よふひしたまはてはし、さやうにおほせ候  
か、やとをまいらするほどは、しんしやくあるましとて、しんし  
やうにこしらへて、まいらせたりけるを、みちにて、したゝめて候  
とて、さしをき給ひける

そのゝち、このひしり、ていしゆにたつね申へき、しさいの候、こ  
のさとをば、何と申候そと、ありければ、くすわのさとゝきへ申、  
さてこれより、おとこ山へは、いかほと候そと、おほせられければ、  
一里あまりときへけり、さてこのころをば、いかなる人の、御ち  
きやう候そと、とひ給へは、きへけるは、もとは、きやうのしやう  
らふの、御もち給しかとも、このほとは、きやうより、ふしの□も  
ち候と申、さて、もとのあるしのしやうらふは、いつくに御わたり  
候と、とい給へは、おきな申けるは、さん候、その御事にて候、ふ  
しきなる、いたはしき事どもの候よと申

さて何としたる御事にて候そと、とわせ給へは、一とせ、元弘のとうらんより、このところには、はなれさせたまひぬ、そのうち、きんくんの、御ひらふにて、御わたり給しか、よろづにつけて、物うくこそ、御わたり候つらん□(にカ)おとこ山に、一七日、御こもりあるへしと、おほせられて、御いて給しか、それより、いかゝしたりけん、御みたいをも、きうたちをも、すてさせ給ひて、うせたまひて候、そのあとにて、きたの御かた、御なげき、申はかりなし、おきなき人々の、ちくこせんを、こいしからせ給ひし御事、申せは申く、おろかなりと、申ければ、さて人々は、何とかならせ給ひて候らんと、の給へは、さん候、そのうち、きたの御かたは、とかくして、二人のおきなき人々を、そたてまいらせ給ひしか、そのあくるなつのころより、いかゝはしたりけん、はわこせんは、御いたはり給しと申ければ

ひしり、あさましげにて、さてそれは、何とかなり候らんとて、おきなきのそはあよりて、ふるひこゑになりて、とひ給へは、おきなき何とてこれほどに、くわしく御たつね候そと、申ければ、もと、きやうにて、しり申つとほどに、さてかやふに、とい申候、たゝありのまゝ、御かたり候へと、おほせければ、又このおきなき、申けるは、御いたはりのありさま、はしめより、をはりまで、一くんに、かたり申ければ、子どもの、かひやふしつらんありさま、いまみるやふ

におほえて、たゞゆめのこゝちを、したりける

さて、そのきんたちは、何とかならせ給ひて候そと、の給へは、おきな申けるは、このとしよりも、此としになり候へとも、いまた、かやうにあはれる事をは、見まいらせす候と申せば、さて、いかなるところに、何として御わたり候そと、とい給へは、この人々の御いり候ところには、あいらしく、ちいさき、たなをかきて、花かうをまいらせ、ゆふへには、おとゝいの人々と、いまたいとけなく御こゑにて、ねんふつ、千へんはかり申てのち、いきてはなれまいらせし、ちくこせん、又、ししてわかれし、はわこせん、一ふつしやうとへ、みちひき給へと、あかうせさせ給へは、此ありさまを見きくに、いかなる、いやしき我らにいたるまでも、そてをぬらさぬは候はずと申せば、又なみたかこほれ候そと申て、さめくくと、なきければ、そのうち、せひの事をも、おほせられす、たゞ、なき給ふよりほかの事そなき

さて、しはらくありて、こていしゆも、御やすみ候へ、我もみちにくたひれて候とて、やかて、ふし給ふやうにて、しのひいて、我かふるきすすみかにそ、ゆき給ふ、やうく、そことみえければ、けにも、おきなきの申つることく、ひの、ほのかに見えければ、この人思はれけるは、あなむさんや、なにとしてか、ひをもあかすらんとおもひて、おつるなみたは、たゞ春さめのことし

さて、かのところゑ、しのひいりて、見給ひければ、くさはうくと、おいしけりて、たれふみわけたる、あともなし、このまより、又、ひ、ほのかに見えければ

くさふかく、あれたるやとに、とほし火の、風にきえぬは、ほたるひなり

と、ふるきうたまでも、いまさら、思ひ出てられけり、又さるにても、こゝにて、きたの御かたの、いかやふにも、おほせられしか、又かしこにて、とうそおほせられ候しかと、これをいてしとき、おさなき物とも、ちゝこせんといゝて、あとをしたひし物を、そのとき、きたの御かたの、おさなき物ともを、すかしとり給ひしありさま、そのときのおもかけ、一ゝに、思ひいたされて、たゝとにもかくにも、さきたつ物は、なみたなりけり

かくて、なくゝ、此人々のありさまを見給へは、あねこは、物をぬいける、けしきなり、わかきみは、そはにて、ひをあかしける、たき物を見れば、しほのやうなる物の、ちいさきを、ひろひあつめてそ、たき給ひける、為世、これを見給ひて、思はれ、あなむきんや、ちゝもなく、はわもなくして、たれをたのみてか、かやうのすまひにて、いたるらんと、かわゆくおもひ給ふに、わかきみいゝ給ふやうは、いや、ちゝはわのこせ、とむらひたてまつらんと、の給へは、あねこは、てうつをつかひ、せうかうして、そなたのかたゑ

よりむきて、れいのねんふつ、千へんあまり申て、え□うし給ふやうは、なむさいはうこくらくけうしゆ、あみたによらひ、いきてはなれまいらせし、ちゝこせん、ししてわかれし、はわこせん、一ふつしやうとへ、みちひき給へ、又我らかやうなる、みなし子をも、とくして、むかへとらせ給へとて、おとゝいの人々は、こゑもおします、なき給ひける

そののち、ちゝこそ、これまできたりたりとて、いてんとし給ひしか、心をひるかへして、おもはれけるは、までしはし、あれほとかはゆき子ともや、又はさしもちきりふかゝりし人をも、ふりすてゝ山さとそその身となりて、しゆかせきしやうを、すみかとする身の、いま又、かれらに見えぬる物ならば、りんゑのさまたけとなりぬへしと、心をひるかへて、そのときも、なのりたまはず

そのゝち、しはらく、おとゝいの人には、ひをあかして、物をぬい給ひけり、わかきみは、おさなき心なれば、ねむたくやおはしけん、かいころひて、ね給ふを、おとゝこせんをはこくみ、あねこは、ちいさきおんそのすそを、ひきませで、おもひあひたる、ありさまなり、ちかきれいをはひかは、しやうさうしやうけんのいにしゑ、又は、さうりそくりの心さしも、これにはよもまさし、又、我ちはうには、かたしげなくも、にんわう十六代、おうしんでんわうの御こ、なにわわうし、うちの御子、たかひに、そくいし給ふ御心□て、あるひ



は、なにわつ(か)のふるきゆきに、ふゆこもり、あるひは又、世をうち川の、あしろきの日を、かさねぬれば、うそとて、ともにくみやうをとゝめ、ついにかくれさせ給ひし、御心さしも、これにはいかてか、まさるへきと、我が子のかわゆさのまゝに、かんか、ほんてふの事までも、思ひ出して、すそに、なみたをなかし給ひけるなを、この物ともか、ふるまひをも、見はやとおもひて、いにしゑ手なれし、せんさいのこかけに、立より給ひければ、くさわう事になく、むしのこゑ、きこえければ、いとゝ身にそふ、おりふしに、おとこ山のふもとに、しかのこゑ、なきければ、我が身のたくひと、あはれなり

かくて、ひめ子かありさまを、み給へは、おとゝはねむり入ぬ、たゝひとり、ひをあかしては物をぬい、物をぬいてはひをあかし、さては、おとゝのはたらき給ふを、かきよせて、ちいさき我がおんそのすそを、ひききせて、ときゝ、物あちきなげに、ねんふつをぞ申給ひける、為世これを見て、あなむさんやな、きたの御かたの、おはしまさは、かれらをこそ、かやうに、かいしやくせられ候へきに、いつしか、おとゝを、かやうにはこくむ事の、かわゆさよ、たれをたのみてか、いたるらんと思へ□、たゝゆめに見るこゝちぞ、し給ひける

そのゝち、しはらくありて、かつとはおきて、なふあねこそせん、ち

ゝこそせんは、おとゝのてをとりて、いまたねむらて、おきていたるそ、ちゝこそせんの、御こひしさに、ゆめに見まいらせさる(た)か、又おひへたるか、せめては、我もさやうに、ゆめになりとも、見まいらせたる事も、あれかしと、何よりゝ、そなたは、うら山しくこそ候へと、おとゝいの人々、手にてをとりくみて、さめゝと、なき給ひければ、為世はこらへかねて、なのりてはやと、おもへとも、心をつよくして、なをこれらかふるまひを、見んと思ひて、そのときも、いてたまはず

さてそのゝち、わかきみをは、とかくすかしたまひて、ひめきみは、かみをそけつり給ひける、みれば、おひしきはにとつきける、このかみを、ふたつにわけゆひて、つまかたなにて、きり給ひけり、そのとき為世は、ふしきの思ひをなし、何とて、かやうにはするやらんと、おもひ給ひて、うちあいらんと、し給ひけるか、なをもしんしやくして、いりたまはず、よくゝ見たまへは、これはいかさま、あした、物まいりにもいつへき、やうたいなり、あなむさんや、何とおもひたつ心そと、いとゝなみたそ、すゝみける、そのゝち、ゑの子などのことくに、たゝふたり、かいらろひてぞ、ふしにける、そのゝち、為世、心はこゝにとまれとも、しつかふせやに、かへり給ひけり、その夜は、さやかになきあかし給ふ、すてに夜もあけければ、御いて立をぞ、まいらせける、しかれとも、為世はいつかう

に、まいりたまはす

さてこの物とも、いつくへか、ゆきつらんと、おもひ給へは、ていしゆにいと申すて、ありければ、をきな、いてあひ申て、いまはいつかたえ、御とをり候そ、又御かへりにも、これへ御いり候へと申ける、為世は、なに事もみゝにもいれず、こゝろにもそますして、れいのおいうちかたにかけて、かれらか、しほのいほりを、よそなから見給へは、やふれたるとを、たておさめて、一人もなかりけり、いつかたえか、ゆきつらんと、あなたこなたを見給へは、二三ちやうあまりへたてゝ、やわたのかたえ、おもむきけり

されはこそと思ひて、おさなき物とものすかたを、見おくりたまへは、あねこは、たひしやうそくにいてたち、ちいさき八かきに、こよひさしつるたひとおほしき、たひに、わらんち、しめはきて、あし、いたけに、あゆめゆきけり、おとゝこせんは、なかおひはかり、ひりやうかきに、物くさをはき、けにはおさなきこゝろなれば、そらつふてうちて、おとりはねて、あねこせんよりも、さきにゆき、あねこせんは、あとにゆき給ひけり、又、さきにより、むまのくるときは、おとゝこせんを、かたゝゑ、ひきのけ給ひて、かいしやくし給ひけるありさま、見る物ことに、たちとゝまり、とれをあはれまぬはなかりけり、かくゆきたまふほとに、やわたのかたえは、ゆきたまはて、つくりのみちのはうゑそ、おもむき給ひける

さて、人にといたまふやうは、うんこうしに、このほと、せつほうの御渡り候よし、うけたまわり候か、いまたわたらせ給ひ候やらんと、といたまへは、七日の御せつほうにて候か、こんにち七日にまんし候、さてめんゝは、それゑ御参り候かとて、あらしく□□ありて、とをりける、この人々は、あふ物ことに、うんかうしゑは、いつかたえまいり候そと、とひたまへは、このみちをかうと、おしへ申せは、をしへのまゝにそ、まいりける

さて、かのてらも見へければ、けにもちやうもんの人々は、しらはまの、いさこのことし、さて、しちうを見たまへは、ないちんより、おうにわまで、なみいたり、このおとゝいのおき□□は、かすにおよはす、この人々は、すまんにんのなかを、かきわけて、とをりたまで、かうさのきわにそ、よしたまひける、為世もゑんのきわまで、より給ひて、この人に目をなますして、いたまひける、さるほとに、おもひゝの、ふしゆをあける、あるひはおやのため、あるひはわつまのため、又は子のため、ししやうのためとて、おもひゝ、こゝろゝのふしゆをそ、あげたまひける、いかにこのおさなき人々も、なにも見えす、物をさしあげ給ひぬさて、たうし、めんゝのふしゆを、かうしたまひてのち、この人ゝのふしゆをそ、よみたまひける、みな人ゝのこゝろさし、いろゝを、あげたまふ、ふしゆのくゝとくによりて、くわこしやうり

やうあんやふのしやうと、九ほんのれんたいに、むまれ給へは、ゑかうして、そのうち、おほせられるは

おくのふしゆの御中に、ことにあはれにおほえ候は、十才にたるやたらさるひめきみ、又は、六や七ツはかりなる、おさなき人々の二人、御わたり候か、ことに御ころさし、せつなる御ふしゆを、さくけまし候そや、てはこのかけごと、おほしきに、かみをぶつにゆいわけて、いれたまひて、これは二しんのしやうりやうのため、我かろかみを、みつからきりてまいらせ候、われらかおと、い、まいにち申候、ねんふつの、くりきにより、かならずく、一ふつしやうとのゑんと、なしおはしませと、かゝれて候か、もしのならひ、しとろくにて、はしかきに、一しゆのうたを、あそはして□り

たまではこ、ふたおやそはぬ、身なし子の、中くいきて、なにゝかはせん

かやうに、いたいけなる御手にて、あそはして候、みな人の、おやこのころさし、せつなりと申せとも、この人々のおさなき御心に、かやうに、ふたおやを、ふかくとふらひ給ふ、ありかたさよ、この人々の御ころさしをもつて、かならず九ほんのれんたいに、むまれたまはん事、うたかないしと、ゑかうして、すみそめの御そてを、しほり給ひければ、ちやうもんの人々、いかなるしつめにいるる

まで、みなそてをそ、ぬらしける、為世入道も、たはうせんとして、おほしける

さて、御せつはう、事おはりて、ゑかうのかね、うちならし給へは、一とにはつとたちける、□のうち、為世入道は、我が子のかたへ、ゆかんとしけれとも、人おくわこみたち<sup>(けむ)</sup>ければ、いつくをとるへきやうもなし、そのまゝ、この人々は、いつかたゑゆきつらん、め見うしなひけり

さて、こゝかしこを、見たまへとも、見へたまはねは、あきれはてゝそ、おほしける、いかさまかれらは、もとのところへそ、かへりたるらん、さりながら、なかく、いきてもなにゝかはせんと思ひて、それよりやかて、つくりみちゑそ、いてたまひけ□、人のゆきとをる事、しらはまのことし

その中に、ある人の申、とをりけるは、あらいたわしや、よもまつそはゑよりながら、なに事に、人はおくあつまらせたまひて候そと、とひ給ひければ、さん候、うんこうしより、せうしんおと□い、けかうせられ候けるか、このはしより、身をなげ

(以下、欠)